は　じ　め　に

こどもサポートネットあいち

理 事 長　 長 谷 川 眞 人

どうしよう　こんなとき *!!* ―児童養護施設の若き実践者のためにー

のタイトルで現在児童養護施設に就職されて1～３年目位の間で起きた、子どもとの間でのトラブルや困難なケースで未解決、あるいは先輩からのアドバイスで解決した事例等これから児童福祉施設に就職する学生や施設で今まさに奮闘している若手職員の参考書となるようにと、現場で悩み苦しんでいる事例や日常的に出あった困難事例等を現在現場で頑張っている若手職員から書いていただいています。若手職員が少しでも施設内での解決に役立たせていただきたいと、ＮＰＯ法人「こどもサポートネットあいち」の理事が中心となり,わかりやすく困ったケースの参考となる事例集としてＱ＆Ａの冊子（困難事例集）を作りました。

　事例を書いていただきました若手職員の皆さまには、内容等は守秘義務を想定し、氏名・施設名を削除させていただいています。私たちの趣旨に応えていただいた皆さんの原稿は編集委員会で一般事例として書き直させていただいています。さらに、タイトルと内容等に関しましても添削させていただき、一般化して利用できるものにと考えて編集させていただいています。

この事例集は施設内で日常的に起きている内容がほとんどです。そんな悩み等を若手職員の先輩である施設職員、施設長、児童相談所職員等からコメントをお願いしています。各項目（学習問題・職員集団・性の問題・問題といわれる行動）ごとに児童福祉を専門とする研究者の解説をお願いしています。

　施設職員になったばかりや少し慣れてきた時に、本当に困った事例に出会った時や子どもとの関係で今ももがき苦しんでいる職員もおられると思います。

是非、この事例集を手にされて、困った時や困難な事例の解決に向けての参考書として利用され、少しでも施設の子どもたちとのトラブルの解決を図ることを期待しています。

**１）学習について**

**事例　『小学生の学習は混乱してうまく教えられません』**

|  |
| --- |
| 私の施設では小学生が20人以上いるため、みんな一緒に学習することができません。そこで十数名ずつ２つのグループに分け、学習の時間も30分ずつにして行っています。けれども十名以上の小学生の宿題を職員一人で見るのはたいへんです。宿題をしないで騒ぎ始める子もいれば、学習室から逃げ出してしまう子もいたり、勉強がわからず怒り出してしまう子もいます。学年も違いますし、学力にも差があります。  子どもの学習を支援する職員自身の教え方がうまくないのかもしれません。そして職員体制も十分ではないとは思いますが、なかなかよい工夫がみつかりません。子どもたちが学習に取り組めるようにするためにはどうしたらよいのか困っています。 |

**先輩職員からの助言　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　西川　信**

職員一人で学力や学年や課題の違う十数名の小学生の勉強（宿題）を見るのは、ベテラン職員であってもかなり難しいことだと思います。まずは複数の職員（ボランティア、実習生なども含め）で関われる工夫ができないかを検討してみてください。そのためには、混乱している学習場面を他の職員にもよく見てもらい、問題を複数の職員で共有できるように努めましょう。施設全体の課題として捉えられるようになれば改善策もたくさん出てきます。そしてそれぞれの子どもの学習内容（宿題）がその子どもの能力に見合っているかよく確認してみてください。見合っていなければ学校の先生とよく相談し、宿題の量や内容をその子の能力に見合うものに変更してもらいましょう。また学習条件や学習環境が適切であるかも点検してみましょう。子どもが遊びたがったり、出かけたがったりしていないか、テレビを見る時間と学習の時間がうまく調整されているか、何時から何時までは勉強という理解がしっかりできているか、学習室や周辺に集中を妨げるような刺激はないか、トラブルを起こしやすい子が隣同士の席になっていないかなどよく確かめ、可能なものは改善するよう努めましょう。複数体制ができたらそれぞれの職員で役割分担をするとよいでしょう。子ども自身で何とかできるグループはA先生、そうでない子どもはB先生が担当するとか、ADHDなど多動傾向がある子どもや、職員を独占したい気持ちが強い子どもなどは、別の時間帯で個別に見るなど臨機応変な対応がとれるとよいでしょう。学習の問題は、学習だけに注目するのではなく生活全体の中で捉える視点も大切です。よく食べ、よく寝て、よく遊ぶといったメリハリのある生活になっているか、生活リズムは確立しているかなど、そうした側面から捉えることで解決の糸口が見つかることもよくあります。

**事例　『勉強をやりたがらない中学生に困っています』**

|  |
| --- |
| 私の担当する男子グループには中学1年生が４人います。中学に入学し、最初の定期テストの結果があまりよくありませんでした。中学校の担任の先生からは、家庭学習の時間を設けて授業の復習などをしていかないと、高校進学が難しくなるかもしれないと言われました。それから毎日1時間の家庭学習の時間と、週に1回1時間、家庭教師に来てもらい勉強をすることにしました。勉強を始めてみると、小学生で習う基礎の部分も理解していないことがわかりました。基礎学力を身につけられるように学習時間は職員がつきっきりで教えるようにしました。学習を始めて半年以上になるのですが、期待するようには学力がつかず、子どもたちの中には「勉強なんかできなくてもいい。高校なんか行かないから」というような投げやりなことをいう子まで出てきてしまいました。なかなか結果が現れないことからこういった言葉が出てきてしまうのではないかと思うのですが、やる気が無くては身につくわけがありません。子どもたちの学習意欲を引き出すにはどうしたらいいのか困っています。 |

**先輩職員からの助言　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　西川　信**

この中学生たちは学習時間が保障され、職員や家庭教師がつくなど学習環境も整えられており、子どもたちもそれなりには学習に取り組んでいるようです。問題は、「学習の効果があらわれない」「基礎的な学力が身に付いていない」「最近やる気をなくしている」ことのようです。まず、中学生の学習援助で押さえておきたいことは、進路や自立の支援のなかで学習援助をきちんと位置づけることです。将来どんな仕事に就きたいのか、そのためにはどんな準備が必要なのか、なぜ勉強しないといけないのかといったことを子どもたちとよく話し合ってみてください。少しでも具体的なイメージができてくると徐々にやる気も出てきます。あるいは、この子どもたちは「頑張ってできた」という成功体験に乏しいのかもしれません。そうであれば自分でも「やればできるんだ」と実感できるような体験が必要かもしれません。学習面では得意科目を集中して勉強したり、検定試験などに挑戦してみたりするなど、効果が具体的に見えやすい学習を取り入れてもよいと思います。次に、それぞれの子どもの能力や適性にちゃんと合った学習援助がされているのかよく確認してみる必要があります。児童相談所などにも協力してもらい、その子どもの能力、得手不得手などをよく確かめ、得意な面を活かした学習方法を工夫してみるというのもよいでしょう。また、基礎的な学力の習得については、「小学生の問題なんか」という気持ちを起こさせない工夫も必要です。ゲーム感覚で子ども同士競争し合うようなやり方を取り入れるというのも一つの方法です。また、どうしたら効果が上がるのかなかなか見通しが立たない場合は焦らず、また一つの方法に囚われるのでなく色々試しながら進めていくのがよいと思われます。

**事例『子どもにとってよい高校進学とは何なのか悩んでいます』**

|  |
| --- |
| サヤカちゃんは中学3年の受験生です。ずっと進学する高校選択に悩んでいました。サヤカちゃんと話をすると、彼女は「小さい頃から保育士になりたいと思っていた」と自分の夢を語ってくれました。そこで保育課程のある、施設から通える私立南高校を勧めると、サヤカちゃんはしばらく考えてそこに行くことに決めました。しかし最近になり、南高校を受験する友人が少ないために、多くの友だちが受験する公立北高校に進学したいと言い出しました。けれどもサヤカちゃんの成績はあまり良くないため、北高校への入学は難しいと学校からは言われています。都心にある北高校への通学には時間がかかるため、朝起きるのが苦手なサヤカちゃんが早朝に起きて登校できるのか心配です。また誘惑に負けてしまいやすいサヤカちゃんが都心の高校に通うと、危険な遊びに誘われてしまわないだろうかといった不安もあります。本人の意思も大切にしたいのですが、職員としてはサヤカちゃんに保育士になる夢を諦めて欲しくないという思いもあります。サヤカちゃんの将来のことも考え、本人にとってよりよい進学支援をしたいと思うのですが、どのようにしたらよいのでしょうか。 |

**先輩職員からの助言　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　宮浦　幸昭**

　確かに、「進路選択」ってとても難しいことです。子どもの人生を左右することですから、いい加減なことや、無責任なことも言えないのが事実です。そして進路選択によって子ども自身は未知の世界に進んで行く訳ですからとても不安なことでもあります。  
将来の大切な「夢」があったとしても、今、現実として目の前にある不安のほうがとても大きいのです。だから、多くの友人と一緒の方に進むことに心が揺れてしまうのだと思います。サヤカちゃんの場合、現実的に見れば、成績や環境、自分の夢を考えると、私立南高校を選択したほうがよいとは思います。けれどもいくら職員がよいと思い、職員の気持ちだけで進路を決めても、本人が納得しなければ、途中で壁にぶつかったとき、他人の所為にして逃げてしまうことも考えられます。進路決定をするのは、最終的には子ども本人です。そのため、職員としてもう一度子どもと向き合ってみてください。そして今の現実と、将来をどうしたいのかじっくり話し合ってみてください。そこで出てきた、押しつけでない、素直に「自分で決めた」という子どもの気持ち、意見を尊重してあげて欲しいと思います。そしてどんなことがあっても職員はあなたを絶対に「見捨てないよ」ということと、自分で決めたことを「応援する」ことを伝えてあげてください。子どもが自分自身で見つけた道を、少しでも真っすぐ歩いていけるよう、いつも見守り続けてあげて欲しいと思います。

**２）性問題について**

**事例　『性的関係を持ってしまう女の子が心配です』**

|  |
| --- |
| ユリちゃんは中学校3年生の女の子です。入所前に10人以上の男性と性的関係を持ったと自分で言っていました。ある日、ユリちゃんに以前に付き合っていた男の子からメールが届きました。ユリちゃんはどうしてもその子に会いに行きたいと職員である私に言ってきました。私はそのことについてユリちゃんと何度も話し合いました。本当はとても心配だったのですが、ユリちゃんを信じることにして、健全な付き合い方をすることを約束して会いに行くことを許しました。けれどもやっぱり不安だったので、彼女が帰ってきてから話を聞くことしました。すると不安が的中し、その男の子と性的関係を持ってしまったことがわかりました。今までも性教育をしていたのですが、すぐに性教育をユリちゃんにしました。話したときには理解してくれたように思えました。けれどもしばらくしたある日、ユリちゃんはちょっとしたことで怒って無断外出をしてしまい、そのときに別の男の子と性的関係を持ってしまいました。ユリちゃんは性教育をしたときにはわかってくれるようですが、その場になると流されてしまいます。どのように性教育をすれば、自分を大切にできるようになるのでしょうか。 |

**先輩職員からの助言　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　石澤　方英**

　性的関係を安易にもってしまう女子児童は児童福祉施設には多いと思われます。中３女子で過去に１０名以上の男性との性的関係をもったというのは性化行動と考えることもできます。まずその女の子がどのような養育環境の中で育ってきたのかをしっかり読み解く必要があるでしょう。不特定多数との不純異性交遊に至る場合、過去の成育歴の中に性的虐待があった可能性が高いと思われます。性的な関係からでなければ自分の存在意義を見出せないのかもしれません。性的虐待を受けた子どもたちは自らを責めてしまうことがよくあります。そこをどう受け入れてあげることができるかが大きなポイントになるのではないでしょうか。この女の子が男の子と性的な関係をもった際に施設職員がどのような性教育を行ったのか事例を読んだだけではわかりませんが、そのような子どもに性感染症のことや健全な交際についてなど「性」に関する知識を入れても効果はあまり出ないと思います。たとえば、児童自立支援施設に入所してくる女の子の主訴は性非行がほとんどですが、援助交際といってもその本質をとらえると金銭的なものが理由ではないことが多いのです。『誰かに抱かれているとき、その時間だけは自分のことを必要としてくれる人が世の中に存在する』といった理由で、不特定多数の男性と性的関係をもってしまう子も多く存在します。自己の存在意義を見出せず、過去の性的虐待を払拭できないまま大人になってしまう子どもたちも多いのです。そのためこの子には性教育と言っても知識を与える性教育ではなく、まずはこの子の存在を認めてあげることができるような「生教育」を実施することが大切です。生い立ちの整理も含めて、安心できる場所、安心できる環境で優しく包み込みながら職員と話ができるとよいと思います。

**事例　『高齢児から幼い子への性的問題行動にどのように対応したらいいのでしょうか』**

|  |
| --- |
| 私が担当している男子高校生のショウタくんが別棟の小学校2年生の女の子に性的ないたずらをしました。このことについてはベテラン職員が対応してくれました。性的いたずらをしたショウタくんが生活する私の棟の女の子たちが、秘密にしてあったこの事件の内容を知ってしまいました。そのためショウタくんと棟内のほかの女の子への対応を、私はどうしてよいのかわからなくなりました。結局、私は何事もなかったかのようにしか関われませんでした。事件の直後から夏休みということで、ショウタくんは親元に長期間帰省できたのでリセットできたようです。けれどもこういったときにどのように対応したらよいのか私はまだわからないままなのです。 |

**先輩職員からの助言　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　石澤　方英**

　性的いたずらはその度合いの大小に関わらず被害を受けた子にとっては心に大きな傷として残るものです。そのため、まずは加害児童と被害児童を一時的に分離することが施設職員として求められます。その上で性的いたずらがどのようなものであったか、被害児童、加害児童双方への聞き取りを通して確認する必要があります。そしてこの被害児童のほかにも被害を受けた子はいないのか確認しなくてはなりません。他の児童がこの事件を知ってしまっているのであればなおさら確認は必要でしょう。この施設の場合、男女混合、縦割りの児童配置をしているようですから、ほかにも被害児童がいる可能性は大きいと思われるからです。聞き取るときに同じ質問を何度も被害児童に聞いたりすると、傷をさらに大きく、深くしてしまう場合があります。そのためできるだけ少ない回数での聞き取りを心がけてください。

　この事例に対する職員の対応としてベテランの職員の方がどのような対応をしてくれたのかわかりませんが、加害男児が長期の帰省に入ったためリセットできたということについてはもう少し慎重に考えなければなりません。性的問題を起こした加害児童が児童相談所に一時保護されることが多くあります。その場合は児童相談所では起こしたことについて十分に聞き、指導をします。けれどもこの子の場合、帰省というだけで分離しかしていないため再度生活をともにした場合、同じような加害行為を起こす恐れが高いと思われます。被害児童を増やさないためにも、そして加害児童にもこれ以上加害行為を増やさせないためにも、個人としての対応ではなく施設全体としての対応が必要です。性的問題は施設全体の問題として職員全員の共通理解のもとに取り組む姿勢が求められます。

**事例　『男の子同士の性的関係が長く続いています』**

|  |
| --- |
| 「消灯後に小５のシンイチ君が、毎晩、中学３年のアキラ君の布団に潜り込み、うるさくて眠れない」と二人と同室の小学校低学年の男子から苦情がありました。これまでアキラ君とシンイチ君は、日中の生活場面では、年齢差もあり一緒に遊んだり行動するような仲ではありませんでした。最近になり、消灯後の巡回で、職員も時々二人が同じ布団に入っているのを目撃していましたが、男子同士ということもあり、職員は、自分の布団で寝るように注意する程度で済ませていました。今回の苦情を受け、改めて二人を別々に呼び、同じ布団で寝ていることについて理由を聞くと、シンイチ君は、「相談したいことがあったから、話を聞いてもらっていた」、「寂しくて一人で眠れないから一緒に寝てもらった」と答えました。一方、アキラ君は、「うっとうしいって言っても勝手に布団に入ってくるんで困っている」と、食い違う答えでした。その後、同じフロアの子どもたちから、シンイチ君は、別室の高校1年のタカシ君、中学2年のヨウイチ君などの年長児たちの布団にも潜り込んでいるという話が出てきました。名前が出た子どもたちを呼び、個々に話を聞いていくと、シンイチ君に年長児の性欲処理をさせているということがわかりました。また、アキラ君もタカシ君もヨウイチ君も、かつては年長児からシンイチ君と同じように性欲処理をさせられていたことを告白しました。こういう連鎖をどうしたら止められるのか困っています。 |

**先輩職員からの助言　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　石澤　方英**

　この事例にあるような出来事は実際に多くの児童福祉施設で存在すると思われます。年上の男児（力の強い児童）から年下児童（力の弱い児童）への性的暴力は今までは表面化していなかっただけの問題です。多くの児童福祉施設ではこういった負の連鎖がその施設で代々引き継がれているのではないでしょうか。したがって施設内でこのような事件が発覚した場合、職員が持たなくてはならない視点は『加害児童も被害児童だった可能性が高い』ということです。児童福祉施設における同性間の性的問題はそのほとんどの背景には力関係が存在しています。つまりその力関係が存在する限り、この性暴力の構図がいつまでも存在することになるのです。被害をとめなければ加害はとまりません。負の連鎖をとめる一番の方法は被害者を減らしていくことです。そのため児童福祉施設では子どもたちに対して「被害者にも加害者にもならないための予防策としての性教育」を実施することが求められます。そしてもうひとつ重要なことは職員が生活場面すべての状況において「性」に関してのアンテナを絶えず高く張れるかどうかということです。入浴時に子どもだけ２人で入ることがあったとき、そこで何かが行われている可能性があるのではないかという考えを持てる職員と何も考えていない職員では、性的問題が起こっていたとしてもそれを発見できる可能性に大きな差が生じます。中学生が小学生と添い寝することがあった場合、その行為に違和感を感じることができる職員と何も感じない職員では問題が起こるリスクも大きく変化するでしょう。職員が「性」に関するアンテナを高く張っておけば、子どもからのＳＯＳがあった場合にも早めに気付くことができます。子どもの安心と安全を守るために、まず職員の意識を変えていくことが大切です。

**４）問題行動について**

**事例　『ウソばかり言う男の子に困っています』**

|  |
| --- |
| リョウ君は、中学1年生の男の子です。リョウ君はウソをつくことがしばしばあるため、周りの子どもたちが少しずつ信用しなくなっています。先日も学校から帰ってくるのがあまりにも遅かったので、私が「何をしていたの？」と聞くと、毎日同じ道を登下校しているにもかかわらず、「学校からの帰り道に迷ってしまって…」と見えすぎたウソを言いました。この前の休日には、朝、部活動に出かけ、予定よりも早く戻ってきたので理由をたずねると「今日の部活は早く終わったから」と、無断でサボってあたかも部活をやってきたかのように言ったりしました。他の子に聞けばすぐにばれてしまうようなこんなウソをいつも言います。私たちは「ウソをつくことはいけないことだよ。でもウソをつくことでリョウ君の周りから友だちがいなくなってしまうのが一番心配なんだ。自分でウソをつかないように直していかないと、リョウ君にとってよくないよ。」と繰り返し話しています。リョウ君もその都度「ごめんなさい。次からは気をつけます。」と言うのですが、なかなか直りません。このごろでは、少しも変わらないリョウ君を見て、私たち職員もあきれてしまうこともあります。今後、リョウ君に対してどうしていけばいいのか困っています。 |

**先輩職員からの助言　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　水谷　光二**

　　　自分が担当した子に繰り返し伝え続けても、ずっと変わってくれないとだんだんと疲れてきてしまうものです。経験の少ない職員の場合、まずは子どもに振り回されながらも味方になってあげ、子どもに寄り添うことだと思います。子どもが起こす認められない行動については、他の職員に入ってもらい注意してもらってもよいと思います。先輩職員もみんな経験してきたことですから十分に理解してもらえます。子どもの味方となり寄り添い、積み重ねた関係を築いたうえで、担当職員としての思いをぶつけてみるのもよいと思います。そうすることで子どもには一層、響くものになります。事例のリョウくんは『周りへの表現の仕方や説明が苦手な子』のように思われます。そこでリョウくんと一緒に『本当はリョウくんの身にはどんなことがあったのか』を具体的に聞きながら、はっきりさせることから始めるとよいかもしれません。そのようにしてウソ（虚言）の中身が理解できた後に、「こんなふうに言わなくても、こう言えばいいんだよ。こうやって言うようにするといいよ」とアドバイスをしてみてはどうでしょうか。言葉による表現が苦手な子であるために、ウソを言ってしまうのであれば、表現の仕方を教えてあげることも大切だと思います。そうすることでリョウくん自身も変われるチャンスになると思います。若い人はどんどん周りの先輩職員に相談して、悩みを一緒に考えてもらってください。一人で悩みを抱えて落ち込んでしまわないようにしてください。

**事例　『盗みを繰り返す女の子との対応に気持ちがすっきりしません』**

|  |
| --- |
| 高校1年生のナオミちゃんはよく物を盗みます。彼女は幼い頃からよく物を盗んでいました。最近では、盗んだことを隠すために嘘を言うようになってしまいました。私たち職員は彼女の何を信じたらよいのかわからなくなっています。ある日、他の子からナオミちゃんが万引きをしているという報告を受けました。その子の話では、ナオミちゃんはお金はないはずなのに、新しい服を持っていて見せてくれたとのことでした。私の施設では万引きや盗みを防ぐために、子どもたちの持ち物を把握し、買ったものやプレゼントで貰った物は報告する約束をしています。けれども彼女は何も報告していません。そこで職員リーダーと担当職員である私が、彼女に盗みのことを確認しました。ナオミちゃんは新しい物を学校の友だちから貰ったと答えるものの、その友人の名前は答えられませんでした。すると彼女は万引きしたと思われる物をすべてカバンに入れて出て行こうとしました。私が止めると、興奮して暴言を言い、ガラスを割ったりして暴れました。落ち着いた後にナオミちゃんと話すと、いくつかの物を盗んだことは認めました。けれども他の物は盗んだことを認めませんでした。その後、本人の意向で他の施設で生活することになりました。そのため万引きや盗みについての指導は十分にできないまま、他の施設に行ってしまいました。彼女に対しての指導が不十分のままでよかったのでしょうか。このようなことが起きた時にはどのように対処すればよいのでしょうか。 |

**先輩職員からの助言　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　山本　圭介**

事例の女の子は盗みがばれ、友達からもらったとウソを言ったものの、盗みを隠しきれなくなりました。そして興奮し暴言を吐き暴れてしまいました。事例では『本人の意向で他の施設に変わった』となってはいますが、どのような方法で本人の意向を確認したか気になります。この施設は彼女がずっと生活してきた場所です。果たして本当に他の施設での生活を望んでいたのでしょうか。追い詰められた彼女には、この選択しか残ってなかったのかもしれません。彼女は幼い時からよく物を盗っていましたが、高校一年生になった今でもまだ盗みが続いています。そして最近は盗みを隠すためによくウソを言うようになったと書いてあります。昔の様子について具体的なことはわかりませんが、今回は自分の盗った物を他の子に見せています。盗んだものを他人に見せるとどうなるかぐらいは、この年齢になるとわかるはずです。どうしてそのような行動をしたのか考えてみたらどうでしょうか。この施設では、万引きや盗みを防ぐために、持ち物を把握しています。でもこの行為は子どもと職員との信頼関係を崩すことに発展しないでしょうか。職員と子どもとの信頼関係をどのようにしたら築けるのか考えてみたらどうでしょうか。

　この事例を三つの視点から考えたいと思います。一つ目は職員集団として統一した支援方針をもつために事例検討を繰り返し、盗みの行動要因を考えることです。二つ目は施設の体制を整え、子どもが安心し、大人を信頼する生活作りを決して忘れないことです。三つ目は職員自身が仕事への意識を高めることです。仕事の負担感に負けたこの事例では、後味の悪い後悔だけが自分の中にいつまでも残っているように思います。問題行動への対処とは、その問題の起きた背景や要因を経験や能力を使って職員が一緒に考え、取り組むことです。

**事例　『入所してから間もない小学生が幼児に暴力をふるいます』**

|  |
| --- |
| 小学１年生のユウイチ君は、入所して半年なのですが、座って食事ができなかったり、よく動き回ったりと落ち着きません。また、とても甘えが強く、すぐに職員を呼んで、気持ちを引こうとします。私が幼児の対応をしていると、わざと邪魔をして幼児を泣かせたり、職員がいない所で、年長幼児を蹴ったり、おもちゃを奪ったりします。幼児には「うるせー」「あっちいけ」「ばーか」といった暴言も言います。私と一緒に勉強をしていても、わからない問題になるとだんだんイライラしてきて怒り始めてしまい、ノートにわざと鉛筆で殴り書きをしてみたり、職員が目を離したときに破ってしまったりします。その都度「どうしてそんなことをしてしまうの？」と理由を聞いて、やってはいけないことを話してはいますが、同じことを繰り返してしまいます。こんな状況なので、叱ることがどうしても増えてしまいます。けれども厳しく言うと、「僕なんか死ねばいいんだ」と言いながら泣きわめくこともしばしばあります。一方で甘えたがる場面も多く、夜は必ず一緒に寝て欲しいと言ったり、絵本を読んでなどとせがんだりして、とてもアンバランスな感じがします。  　幼児を蹴ったり、怒鳴ったりする暴力や暴言などを何とかしたいと思っています。特に職員の見ていないところでの暴力を何とかやめさせたいのです。 |

**先輩職員からの助言　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　中屋　浩二**

私の勤めている施設は数年前、大舎から中舎へと移行しました。その時に配慮したことのひとつが小学生から幼児への暴力でした。小学生の中には暴力だけではなく、幼児を付き従えて支配的な関わりをする子もいました。施設の職員配置は十分ではないため、職員は児童全体に目を向けていなければなりません。そのためどうしても一人ひとりに目が行き届かなかったり、個別の関わりができにくくなってしまいます。このことは子どもにとっての愛着対象がぼやけてしまうことになり、結果として幼い子ども同士による職員の争奪戦が始まってしまいます。

この事例のように愛情欲求が問題の基にあるような暴力に対処するためには次のようなことが考えられます。①少しでも職員の目が行き届き、個別関与ができるような環境にする。②幼児と学齢児を分けて安全基地を作る。③性の問題から男女の生活圏を分けるというものです。これらのことを配慮し、私の施設では60名定員を、小学生以上男子2ホーム、小学生以上女子１ホーム、幼児１ホームの４つに区分し、それぞれ15名ずつにしました。その上でホームごとの担当職員を配置し、中舎へと移行しました。これによって暴力は激減しました。子どもたちが生活する場の理想は“環境とは関係なく暴力はない”ということですが、子どもが施設に入所した経緯や少ない職員配置での集団生活を考えると、子どもの中で湧き上がる様々な思い、行動化はそんなに簡単には解決はできません。まず安心・安全な環境をどう整えるかが大切だと思います。非暴力についての工夫した教育は自虐的になっている子どもには入りにくいものですが必要です。目の前の問題への対応だけでなく、中・長期的な視点で子どものニーズを満たし、関係を築くことも大切です。そして「暴力を振るうと、私は悲しくなる」というアイ（Ｉ）メッセージを投げかけるだけでも、子どもに響いていきます。

**事例　『暴力を受けてきた子が暴力をふるいます』**

|  |
| --- |
| 私は就職して１年目の職員です。幼児期から入所している中学１年のショウタ君への対応に悩んでいます。最近は、小学生を脅したり、陰で殴ったり、わざと意地悪を言ったりする場面が目立つようになりました。ショウタ君は私が就職したころは落ち着いていましたが、最近になって職員にも「うっとうしい」などと言ってきたり、私の言葉がけも聞かないふりをすることが増えてきました。思春期にさしかかり、気持ちの揺れがあるのもわかります。けれども小学生に対しての脅しの言葉や、暴力はやってはいけないことをその都度伝えるようにしています。そのたびにショウタ君は、「僕はもっとヒドイことをやられてきた。だからやってる。」とか、「ここではそういうルールがある」と言います。  　ショウタ君がそうした言動をするのは、長年いる児童指導員の前ではあまりなく、私のような経験が少ない職員の前で起こすことが多いのです。そのことをベテランの児童指導員に報告しても最初は驚かれてしまいました。また、ショウタ君はいろんな面があるので、学校では落ち着いているようです。  　今後ショウタ君へどのような対応をしていったらよいでしょうか。 |

**先輩職員からの助言　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　中屋　浩二**

この事例の暴力要因は“自分はそれ以上の暴力を振るわれてきた”という傷つき体験にあるように思われます。長期間に渡り、施設内で暴力を受けてきたことは、それまで“職員に守られてこなかった”ことでもあります。私の施設で同じような問題に対応した内容を紹介します。暴力を止められなかったことを真摯に受け止め施設長といった責任ある立場の職員から、辛い思いをさせてきたことの謝罪を行いました。誰が謝罪するかということの意味は大きいものがあります。次に“暴力は絶対に許されないもの”として子どもの辛かった思いに応えるために施設全体の問題として取組んでいくことを約束しました。

そして“暴力は許されない”という風土を施設内に浸透させていくために、子どもたちを集めて話し合いました。その内容は次のようなものでした。①暴力がいかに人を傷つけるかについて、傷つける側も、傷つけられる側もともに自覚を促す。②暴力を振いたくなるのはどのような時なのかを確認し、暴力を生まない環境づくりやルールを考える。③暴力を受けたら、すぐに訴えられるためのしくみを考える。④暴力が起きた時には、当事者だけの問題で終わらせず全体の問題として対策につなげるために話し合うことを予め確認しておくといったものです。

そして職員としてやらなければならないことは、一つ目として暴力が起きたらそれを風化させずすぐに抑止につなげる。例えば、反省期間を設け、その間、作業を課しつつ、気持ちに目を向けた振返り日記を書いたりして、非暴力について意識できるようにします。二つ目は被害を受けた子の心身の安心・安全を確保することです。

高学齢児の暴力は大ケガにもなりかねない事態ですから、早急に止めさなければなりません。一人の職員が抱えて手遅れにならないよう、他職員や児童相談所などとともに連携しながら対応していくことが大切です。

|  |  |
| --- | --- |
| どうしよう　こんなとき!! 　　　　　　　　――児童養護施設の若き実践者のために | **こどもサポートネットあいち編 どうしよう　こんなとき!! ――児童養護施設の若き実践者のために** （B５判54 頁　／税込価格1000円）  **わかりやすくどこでも活用できるＱ＆Ａの事例集  児童養護施設に就職されて1 ?３年目位の間で起きた、子どもとの間でのトラブルや困難なケースで未解決、あるいは先輩からのアドバイスで解決した事例等これから児童福祉施設に就職する学生や施設で今まさに奮闘している若手職員の参考書となるようにと、現場で悩み苦しんでいる事例や日常的に出あった困難事例等を現在現場で頑張っている若手職員から書いていただいています（はじめにより）。**  ＜内容目次＞　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　第１部　生活場面で起きること　《学習について》１小学生の学習は混乱してうまく教えられません　２勉強をやりたがらない中学生に困っています　３子どもにとってよい高校進学とは何なのか悩んでいます　４夢を叶えようと進学したけれど…【解説】児童養護施設における教育問題《職員集団》５若い職員は意見が言えません　６一人勤務でトラブルが繰り返し起きてしまいます【解説】　職員集団について　《性の問題》７性的関係を持ってしまう女の子が心配です　８高齢児から幼い子への性的問題行動にどのように対応したらいいのでしょうか　９男の子同士の性的関係が長く続いています【解説】〈性〉の問題　《問題と思われる行動について》11 ウソばかり言う男の子に困っています　12 盗みを繰り返す女の子への対応に気持ちがすっきりしません　12 学校に行かない中学生　13 タバコが止められない高校生　14 無断外出を繰り返す中学生に困っています　15 入所してから間もない小学生が幼児に暴力をふるいます　16 暴力を受けてきた子が暴力をふるいます【解説】問題行動について 　　　　　　　　　　第２部　子どもの施設で働いてよかった　―先輩からのエール― １女性が働くとき　―子どもたちや仲間に支えられて―　２子どもたちが私を変化させ、私をそだててくれた！仲間はどこかにいる！　３児童養護に関わって得られた人とのかかわりと今の自分  （編者代表紹介）吉村譲（愛知東邦大学人間学部准教授）　 吉村美由紀（日本福祉大学社会福祉実習教育研究センター）　伊藤貴啓（名古屋芸術大学人間発達学部准教授） 　　　　　長谷川真人（こどもサポートネットあいち理事長） |